

一心寺かわら版

第十号 平成十九年三月発行

「常識」

私たちは日々どのように生きていますでしょうか。特別なことはしていないといっても、さまざまなことをして生きています。その行動はどのようにして決めているのでしょうか。無宗教だ、何の哲学もこだわりもないといっても、必ず何かしらの考えを基にしているはずで

よく「常識」ということばを耳にします。その常識とは、辞書（小学館・新選国語辞典）によると「一般の人がもっている、また、もつべき知識、理解力、判断力」とあります。私たちは常識に照らし合わせて行動する、もしくは自らの言動は常識だとすることによって安心して行動しているのではないのでしょうか。

しかし、常識というものは非常にあいまいです。例えば家族や結婚です。平安時代は女性の家に男性が通う、いわゆる通い婚だったといわれています。その後、時代は流れて男性のところに女性が嫁ぐようになりました。また、昭和の終わり頃までは「男子厨房に入らず」が常識といわれ、高度成長期には「亭主元気で留守がいい」といわれました。しかし現代は、「厨房に入らず」や「留守がいい」ではなく、夫婦で子育てや料理を分担しているところが多いといえます。また、昔は何世代も一緒にいる大家族が当たり前、今は一世帯平均三人を切っているといえます。

常識は「一般の人がもっている」とありますが、人間が作り出しているものであり、時と場所と人によって変わるものなのです。そして人は、自分が納得できないものを常識として認めたくはないものでしょう。私も家族や友人との会話でそれを実感します。

それは人間の根本が、常「我」識だからでしょう。私たちは意識するしないにかかわらず、自分を中心にもものを見ていることが多いのです。つまり、自らの欲を満たすために行動しているのが生活の大半といえるでしょう。現在は法律を犯さなければ悪ではないという意識が強くなっているようで、欲望の増大化が指摘されています。欲望が大きくなれば、人間、動物、植物などのいちとの間で、さまざまな問題が起きてくるのは明白でしょう。

自分でない他のものを基準とすることもあります。例えば、常「世間」識ということはないのでしょうか。人からどう見られるかが気になる、人から良く思われたいという思いから自分を押し殺している人もいるでしょう。しかしこれは、自分がしたいことよりも人からこう見られたいという気持ちの方が上ということであって、常「我」識の一つと言えるでしょう。

また今、日本は常「米」識、常にアメリカの意向を考えて行動していると言われます。しかし、そのアメリカは自国民を守るための戦争を正義と考え、テロ防止として先制攻撃さえも正当化しています。それが彼らの常識ということでしょうが、世界を見渡して見れば独善的と判断する国も少なくないようです。しかも自

国民を守るといいながら、ハリケーン被害の救済では人種差別、階級差別とも思われるような対応を見せるなど、自ら矛盾を露呈しています。

数年前に青年会の柱掛け法語に、あいだみつおさんの「そんなとか人間のものさし うそかまことかほとけさまのものさし」という言葉を掲載しました。つまり常「我」識は自らの損得をものさしとする生き方になり、衝突が起き、苦しみを生みます。その私を「念仏の衆生を撰取して捨てたまはず」(『観無量寿経』)と、念仏するものを安らかな浄土へ救うとおっしゃっているのが阿弥陀仏です。

では私たちはどう生きていけばいいのでしょうか。それは移ろいやすい常識、苦しみを生む常識ではなく、常「仏」識、ほとけさまのものさしである「まこと」のところで生活することを勧められているのです。お経に「もろもろの衆生を視そなわすこと、自己のごとし」(『無量寿経』)、「仏心とは大慈悲心これなり」(『観無量寿経』)とあるように、すべてのいのちを自らのいのちとして見て、楽を与える「慈」の心、苦しみを抜く「悲」の心で私のことを常に思い続けて下さっているのが仏さまです。

お念仏して、私はどうすべきかを仏さまの心に問いかけて、煩悩一杯の私でありながらも、常「仏」識、仏の願いの中で生きていきたいと思わせていただくことです。



眞宗仏事について⑦数珠・合掌

仏さまに手を合わせるときには数珠(念珠)を用います。数珠は經典に由来があり、本来、称名などの回数を数えるためのものといわれています。最初は百人あるといわれる煩悩を断ずるという意味で百人珠からなるものが用いられていたようですが、次第に、その半数、四分の一のものなどが用いられるようになりました。当宗派では一般には単念珠を用います。

合掌は両手を合わせて房が下になるように通し、親指で軽くおさえて指を揃えて胸の前で手を合わせます。この姿勢から、お念仏を称えて静かに上体を約四十五度傾け、一呼吸半の後もとの姿勢に帰り、両手を下ろします。眞宗では数珠は称名を数えるためではなくまた、すり合わせるわけでもなく、ただ仏さまを仏徳讃嘆する礼拝のための法具として用います。合掌しないときは左手の親指と他の四指の間にかけます。



お経ってなあに？⑦回向（えこう）

一般に法事の最後には「回向」が唱えられます。回向というのは、パリナーマあるいはパリナーマナーという言葉の翻訳語で、「ふり向けること、廻施すること」などの意味で用いられました。

回向句を唱える意義は、仏事法要を勤め、その功德をもつて亡くなった方および一切衆生に分ち与え、その方々の仏道を成就させようとするところにある、という考え方をする宗派があります。

しかし、浄土真宗は自ら修めた功德を回向して仏道を成就しようとするものではなく、阿弥陀仏の回向による仏道の成就を目指しています。阿弥陀仏は、罪悪深重の凡夫であって仏道修行がでない私たちの姿をみそなわして、救いの道をご用意して下さったのです。ですから回向句も、自らが仏事法要を修めた功德を他の人々に回向するという性格のものではありません。

もつともよく読まれる回向句は、浄土真宗七高祖の一人、善導大師の句「願以此功德 平等施一切 同発菩提心 往生安樂国」（がんにしくどく びょうどうせいっさい どうほつぼだいしん おうじょうあんらくこく）です。

この句の意味を窺ってみますと、まず「此功德」とは、名号の功德、阿弥陀仏の人々を救うはたらきです。そして「平等施一切（平等に一切に施し）」とは、行者自らが修めた功德を回向することをいっているのではなく、「此の功德」をいただいた念仏者の常行大

悲のすがたをあらわしたものです。

常行大悲とはまず自らが念仏することであり、他の人々に念仏を勧めることであると示されています。自ら念仏すること（自信）が、すなわち他の人々に念仏を勧めることになる（教人信）ということとです。この教人信を示しているのが、「平等施一切」のご文です。また「同発菩提心 往生安樂国（同じく菩提心を発して、安樂国に往生せん）」ですが、菩提心とは他力の信心のことであり、安樂国とは阿弥陀仏の浄土のことですから、みなともに信心をいただいて阿弥陀仏の浄土に往生しましょう、という意味になります。

阿弥陀仏の回向には、浄土に往生することと浄土から還ってき人々を救う活動をするこの二つのはたらきがあります。さとりを開いて仏になる。そして仏となったからには、人々とともに喜び、悲しみ、また一緒に苦労しつつ、人を仏道に引き入れ、さとりへと導く活動をしなければ甲斐がないところです。

そのお心をいただき、回向句として經典読誦の最後にお勤めしているのです。

『季刊せいてん』六十四号・本願寺出版社より抜粋